

銀座水族館 (七つの海の魚および水産切手)

—(5)—

東京支店 営業第一課 神原 勇

コイ目コイ科コイ

学名 *Cyprinus carpio*

英名 carp

和名 野性種 マゴイ

養殖種 ヤマトゴイ・オオミゴイ

(琵琶湖)

コイは分類学的には一種とされているが、変異性が強く、その分布する地域、生息する場所、飼育による交配淘汰等により、数多くの変種が知られている。

稚魚乃至一年生の若魚のときのコイとフナとは区別がしにくい、これは両者が頗る近い種属によるからで、はっきりした相異点はフナにはない4本のヒゲがコイにはある事である。

一般的に見られるコイの体色は背面が濃紺色を帯びた黒色で、腹面は黄白色、頭部を除いた、からだ全体が円鱗で被われている。外来種所謂ドイツゴイにはカガミゴイ(鏡鯉)とカワゴイ(革鯉)とがあるが、カガミゴイには全く鱗がなく、カワゴイには数枚の大きな鱗があるので、判別は容易である。ドイツゴイはこれらの鱗の特色の外に体高が高く、体側の筋肉も良く発達しているが、これらのことは体型が良く、成長が早い事を示すものである。コイの体型の良否の判断は、体高を1としたときの体長の比で示されるが、体長の数字が小さい程良型と称される。

養殖ゴイ 背高型 1:2.0~2.6

背低型 1:2.6~3.6

野性種 1:3.0~3.6

コイは河川、湖沼、池沼等の下層特に平地の浅い池沼、緩やかな流れの川の濁った水を好んで生息しているが、水温20°C以上に上昇すると活潑に動き廻り、摂餌を開始する。冬季氷結した水面下でも死ぬ事はないが、不活潑になる。夏季可成りの高い水温(37~38°C)でも除々に慣らしていけば飼育出来るが、40~41°Cで斃死する程極めて適温帯が広い淡水魚である。

産卵期は凡ね4~6月であるが、生息地域により異なり南へ行く程早くなる。一尾の産卵数は親魚の大きさ、年齢等により差異があり大略10~70万粒で、水温18~20°C前後に上昇する時期に水草の繁茂するところに産卵する附着卵で、一粒の大きさは約1.5mm位である。孵化日数は水温20°C前後で5~6日位かかり、仔魚の大きさは6mm程あり更に8~9mm位になれば人工餌料の微細な粉末はもとより、ミジンコの成体まで摂るようになる。成長は水温の高低、餌料の量、池の大きさ等で全く区々であるが、大体一年で15cm、二年で18~25cm、三年で30cmの大きさとなる。家庭の小さい池で飼育すると一年で数cm位にしかならない。

コイは昔から格調の高い魚で、日本料理では儀式魚として、タイを大位、コイを小位として、式包丁の材料として広く用いられている。中国でも祝宴の魚として扱われ、竜門登鯉(コイを姿のままカラ揚げにして甘酢アンかけとしたもの)という献立を見ることがある。

コイ目コイ科コイ

学名: *Cyprinus carpio*

英名: Carp

鯉は中央アジアが原産地であり、世界各地に分布している。変異性が強く、個体的に又地方的に多種多様な変異が見られる。野性種は一般に体高が低く、体幅が厚い。人は魚の成長が速い種である。飼育種は種々の型がある。ヤマトゴイは体高が高く、体色がやや淡い。ドイツゴイ(日本に移植されたのは1904年)はカワゴイ(革鯉)とカガミゴイ(鏡鯉)とが別れる。前者は側線が断続的であるが、後者は側線が連続的である。後者は側線が連続的である。



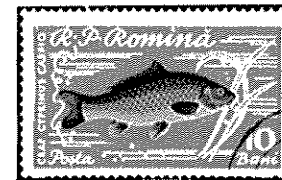
ハンガリー - 1967



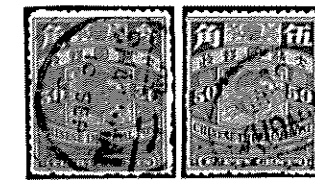
日本 1955



カガミゴイ チェコスロバキヤ - 1966



ルーマニア - 1960



清 - 1902 清 - 1903



北グトナム - 1963



カガミゴイ 西ドイツ - 1964



ニカラガ - 1969



日本 - 1966